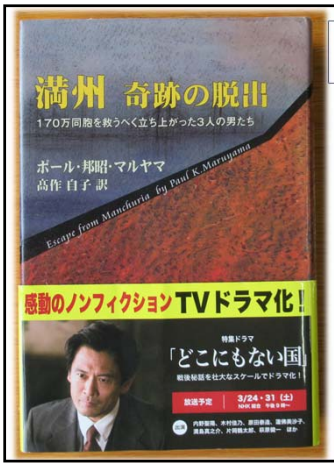


NHKドラマ
「どこにもない国」の原作

丸山邦雄
（長野県飯山市出身）

はじめに…　今日の内容について

1　満蒙開拓について

「満蒙開拓」のあらましについて、長野県や更級郷、埴科郷などとも関連させながらふりかえってみます。

2　丸山邦雄氏のあゆみ

終戦後、旧満州に残された170万人の引き揚げに尽力した、飯山市富倉地区出身の「丸山邦雄氏」のあゆみについてふりかえってみます。

1　満蒙開拓について

「満州国」「更科郷・埴科郷開拓団」はどこにあったのか

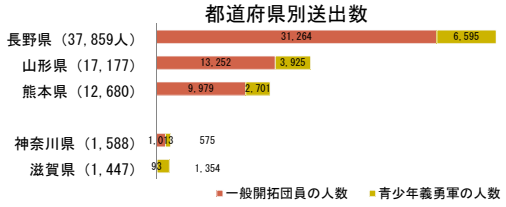
（1935年頃の東アジア）

「開拓団」として、どれだけの人々が満州に渡っていったのか

満州移民の総数（人）

全国	321,882人	（一般開拓団	220,255	青少年義勇軍	101,672）
長野県	37,859人	（一般開拓団	31,264	青少年義勇軍	6,595）
更級郡	1,008人	（一般開拓団	736	青少年義勇軍	272）
埴科郡	855人	（一般開拓団	552	青少年義勇軍	303）
＊飯山市	960人	（一般開拓団	811	青少年義勇軍	149）

都道府県別送出数



※数値は「満蒙開拓平和記念館」資料　と「長野県満州開拓史」（名簿編）による。

長野県が多数の開拓団員を送り出したのはなぜか

（1）農村の貧困
- 繭価をはじめとした農産物価格の下落
- 耕作地の狭さ
- 農村人口の過多

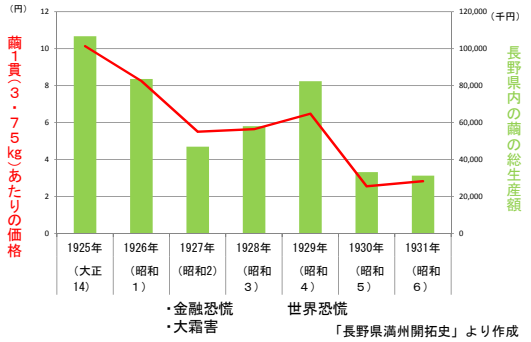
（2）行政（県、町村長、農会など）の強い働きかけ
- 経済更生計画

（3）学校の先生の強い働きかけ

（4）長野県は大正時代からブラジル移民などを送り出してきたという経験

繭一貫（3.75kg）あたりの価格の推移と長野県の繭の生産額の推移

※ 下水内郡内の農家の繭平均出荷量34貫目、当時の農家の平均収入550円



「長野県満州開拓史」より作成

小県郡青木村青年会発行新聞「青木時報」一〇四号（昭和5年7月1日発行）

「釣瓶おとしの惨落で遂に二圓台現出 生産費の半額にも追いつかぬ繭値に養蚕家生色を失う」

春繭の出回り以来、順次釣瓶落としに惨落し、三圓台は勿論、二圓台さえあらわれ養蚕家は生色を失っている。

養蚕家が青ざめるのも当然で、一貫目の繭にかかる生産費は安積りに概算しても六圓四五十銭はかかるのであるから、生産費の半額にも追いつかぬ様な繭をもっては泣くにも泣けず青息吐息の状態である。

「国策」の一つとしてすすめられた「満州移民」

(1) 「五族協和」の国家の建設
→ 日本人、漢族、朝鮮族、満洲族、蒙古族が協調して暮らせる国

(2) 「王道楽土」の建設
→ 思いやりのある政治が行われる平和で理想的な国の建設

（満州国旗）

(3) 「満州に行けば、２０町歩の地主なれる」しかも、「２０年間、肥料はいらない」

(4) 「満蒙は日本の生命線である」
→ 満州は戦略的にも経済的にも日本の存亡がかかった地域
→ 満州の資源をもとに戦争を遂行する

満州移民にはどのような形態があったのか

(1) **試験移民（武装移民）**＜第一次～第四次＞
- 1932年（昭7）～1935年（昭10）までの初期段階
- 最初は在郷軍人から

(2) **分村移民、分郷移民** ＜第五次～第一四次（昭和20年）＞
＜長野県からは63団＞
- たとえば満州大日向村、**更級郷開拓団、下水内郷開拓団**

(3) **満蒙開拓青少年義勇軍** ＜長野県からは32団＞
- 1938年（昭13）から募集開始。満15歳～19歳までの青少年が3年間の訓練の後、開拓団に移行

(4) **帰農移民**（他の職種から満州に移民して農業に転業）

(5) その他、自由移民、勤労奉仕隊

国策の名のもとに強引にすすめられた満州移民

（1）埴科郷の場合

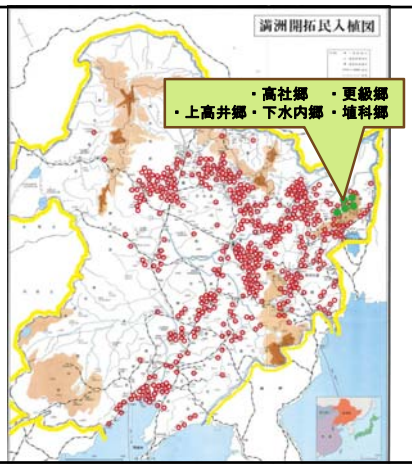
「分村（移民）を決議した町村長会は、ただちに建設本部を設置し、‥9月18日には‥３年間に３００戸の送出計画と団員の募集日程とその方法まで取り決めた。県の指示通りに体制を整え、末端の委員まで、町村長が任命して募集に入ったが、応募者は一人もいなかった。」

（2）更級郷の場合「渡満の動機」

「わたくしは、学校を出ると大阪の日本アルミに勤務し、待遇も決して悪くなかった。しかし、１６年３月、休暇で家に帰ったところ村長が座り込んで、どうでも更級郷にいってくれということであった。はじめはとてもその気になれなかったが、満州開拓は国のため郷土のためと、その理想像をいろいろと説明されたので、兵隊にとられたと思っていきましょうと腹をきめてゆきました。」

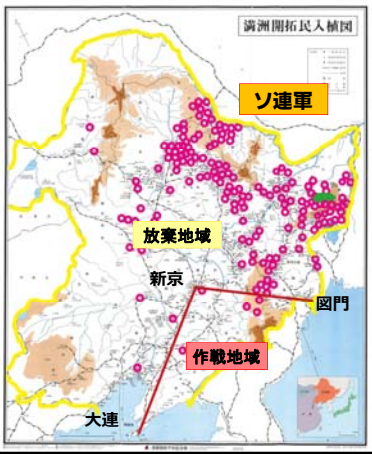
「長野県満州開拓」（各団編）より

一般開拓団の入植地



○ 開拓団の入植地
● 北信地区からの開拓団入植地
／ 国境

一九四五年（昭和20）5月（大本営 → 関東軍）「鮮満方面対ソ作戦要領」

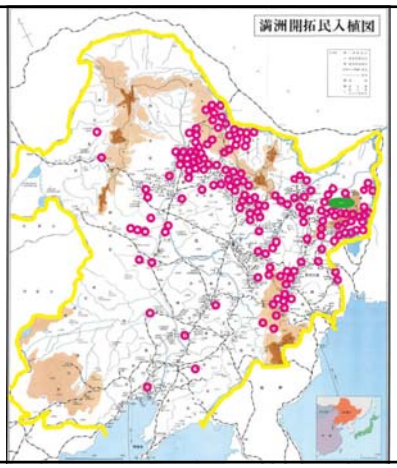


（1）五月三〇日「関東軍は京図線、連京線以東の要域を確保し持久を策し、大東亜戦の遂行を有利ならしむべし」

（2）関東軍は兵力の増強を痛感し、すべて満州内の邦人の召集でまかなう計画の了解を得る。

（3）「根こそぎ動員」

青少年義勇隊の入植場所



■：北信地域からの開拓団の位置

○：義勇隊開拓団、義勇隊訓練所

一九四五年（昭和20）5月頃の満州の下水内郷でも、「召集」が始まる。

1945（昭和20）年5月

「ついに私にも召集令状がきました。養豚計画が順調に進んでいた矢先のことです。妻は肺炎で寝込んでいます。娘は３歳と１歳の双子の３人。行きたくありませんでした。いよいよ出征のとき、長女が叔母に背負われて、日の丸の小旗を無邪気に振っていたのが今でも目に浮かびます。あれが今生の別れとなってしまいました。」

＜「生きとし生ける詩」より抜粋＞

更級郷開拓団の終戦当時の様子

「昭和20年5月の大動員となったが、団は最後まで全団一丸となった共同経営に終始した。7月は何回も召集令状が大量にきて、8月はじめの応召で、若い団員と幹部はほとんど軍役にかり出され、召集者は64名にのぼった。幹部は団長、校長、診療所長の3人。団員は年配者だけで、ソ連参戦時の在団者は団長以下407名、その大多数が婦女子であった。」

＜「長野県満州開拓史」（各団編より）＞

一九四五年（昭和20）8月9日 ソ連軍の侵攻

1945（昭和20）年8月９日

朝１台の戦闘機が飛んできました。何事だろうと思っていたら「ただちに武装して出動せよ」との命令が出ました。このとき関東軍は全員南方に行ってしまったため、戦闘機も大砲も戦車もなく、ただ歳をとった新兵ばかりが残されただけでした。

＜「生きとし生ける詩」より抜粋＞

開拓団の終末

（昭和20年）8月21日はのどかな日和だった。更級郷を先頭に、高社郷が最後尾で、延々長蛇の難民は歩き続けた。

24日の朝、各団の幹部は最終措置を協議したが、結論は出ず、団ごとに自由行動をとることとなった。その時、本部部落には3000人近い難民がいた。しかし、25日に高社郷の全員自決が確認されると、26日の夜半ごろまでには、大部分の団は婦女子と病人を残してここを脱出し、最後まで、団長を中心に決戦を覚悟したのは更科と埴科の２団だけであった。

＜「長野県満州開拓史 各団編」より＞

「更埴満州開拓殉難慰霊碑」（上山田温泉城山地籍）

日本人180万人棄民方針（終戦直後）

（1）昭和20年8月26日 関東軍参謀長「大陸方面に於いては在留邦人および武装解除後の軍人は、ソ連の庇護下に満鮮に土着せしめて生活を営むごとくソ連側に依頼することを可とする。」

（2）「満鮮に土着する者は日本国籍を離るるも支障なきものとす。」

今日の内容について

1　満蒙開拓について

「満蒙開拓」のあらましについて、長野県や更級郷、埴科郷などと関連させながらふりかえってみます。

2　丸山邦雄氏のあゆみ

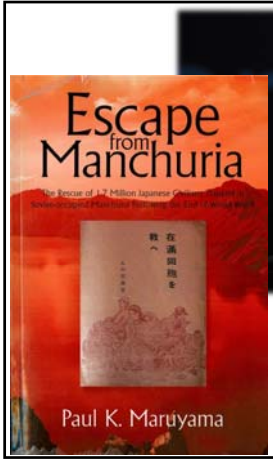
終戦後、旧満州に残された170万人の引き揚げに尽力した、飯山市富倉地区出身の「丸山邦雄さん」のあゆみについてふりかえってみます。

2　丸山邦雄氏について

満州の惨状を内地に具体的に伝えた丸山邦雄氏　「在満同胞を救え」より

「私は12月、春日国民学校を訪れて、そこに集団生活をしている難民の悲惨な場面を見て慄然としたのであります。校舎の窓ガラスはほとんど破れ、寒風が遠慮なく吹き込み、その中に生活している難民の大部分は筵や麻袋や破れた毛布をまとい、中には綿の露出した布団等を敷いている者もありますが、布団をもっている者は良い方であります。そうして板の間に寝ている病人は見ている前で死んでいくのであります。」

＜丸山邦雄 著「在満同胞を救え」昭和21年6月発行より＞



丸山邦雄氏の三男
「ポール･邦昭･丸山」氏

著書「Escape from Manchuria」

「満州 奇跡の脱出」

丸山邦雄氏の著書（１）

「ユートピアをめざして」

・1970（昭和45）年4月発刊

・丸山邦雄氏67歳時（明治大学を定年で退官した後）の発刊

「ユートピアをめざして」の序文より

私は今までめざしてきたもの、求めてきたものは何であったかということを種々の角度から真剣に考えてみた。そして、それは、やはり「ユートピア」ではなかったか…。

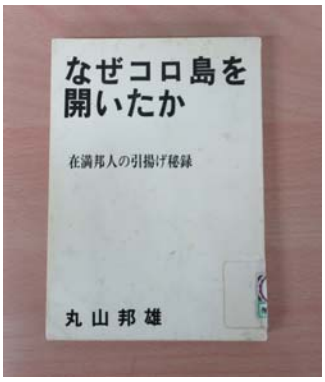
人生の底辺にあって茨の道を歩いてきた私の過去を憶い起してみた時、そこには確かにユートピアをめざして闘ってきた三つの足跡がくっきり浮彫にされてきた。

第一は、在米留学当時の排日移民法によって蒙った不合理を是正したことであり、

第二は、終戦後、在満同胞救出のため全力を捧げた闘いであり、

第三は、母校の教壇に立ってから教学面の浄化、刷新に精魂を傾けた事件であった。

丸山邦雄氏の著書（２）



「なぜコロ島を開いたか」

・1970（昭和45年10月　発刊

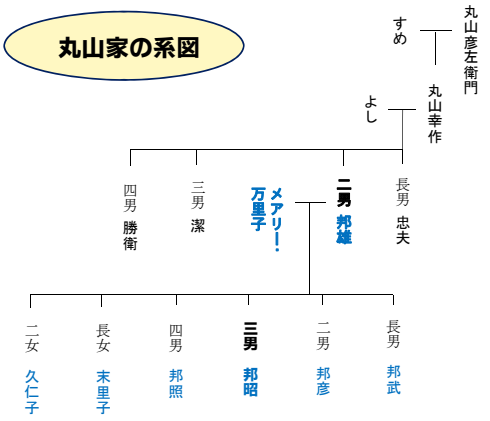
・丸山邦雄氏67歳時の発刊

丸山邦雄氏の生誕地
飯山市富倉地区滝ノ脇

丸山邦雄氏の生家跡（富倉地区 滝ノ脇）

父 丸山幸作　母 よし
の二男として生まれる

丸山家の系図



丸山邦雄氏の略歴

(1) 1916(大正5)年３月 地元の富倉小学校卒業
(2) 1930(昭和5)年３月 明治大学法科卒業
(3) 1930(昭和5)年４月 米国留学 ～1937 ← 小坂順三先生ご夫妻のご厚意(本人の記述)
・ピュージェット･サウンド大学 ・ワシントン大学
・コロンビア大学で学ぶ
(4) 1935(昭和10) メアリー 万里子 武田と結婚
(5) 1937(昭和12) 離米 ヨーロッパ各国を視察 ～38
(6) 1939(昭和14) 昭和製鋼所に入社しばらくして渡満 終戦 在満同胞救済代表
(7) 1952(昭和27) 明治大学講師 教授 ～1969(昭和44)
(8) 1981(昭和56) 逝去、享年78歳

日系アメリカ人 メアリー万里子 と結婚

メアリー 万里子 武田

- 1911年シアトル生まれの日系二世
- 父 武田清次郎は15歳で米国へ移住、邦字新聞発行などを手掛ける
- メアリーは高校時代まで両親の故郷の山口県で育つ
- その後、ワシントン大学で学びながらカトリック教会で日本語を教える
- 1935年3月結婚

昭和製鋼所に入社後の丸山邦雄氏

写真２列目、右から４人目が丸山邦雄さん（1943年頃）

丸山邦雄氏が見た終戦直後の満州の様子

1945（昭和20）年8月29日、営口の邦人は（侵攻してきたソ連軍によって）一斉に立ち退きを命ぜられたのであります。‥（略）‥

立ち退き避難民の中には、髪を切って丸坊主となり男の服装をした婦女子も多く、また、顔にわざわざ傷をつけて包帯をしたり頬に絆創膏をったり泥を塗ったりして、故らに容貌を醜くして虎口を逃れようとした夫人も多かったのであります。

＜丸山邦雄 著「在満同胞を救へ」より＞

丸山邦雄氏が奉天で見た落書き

居場所になっている（奉天の春日町の国民）学校の廊下の壁に鉛筆で落書きがしてあった。**「殺すな、捨てるな、呉（く）れろ、売れ」**と。そこに住む難民の中には自暴自棄になって自分の子どもを殺したり捨てたりする人があるので、それを戒めたものだ。事実、子どもを売る人も少なくなく、女の子であると相当高い値で売れるという。

＜丸山邦雄 著「なぜコロ島を開いたか 」より＞

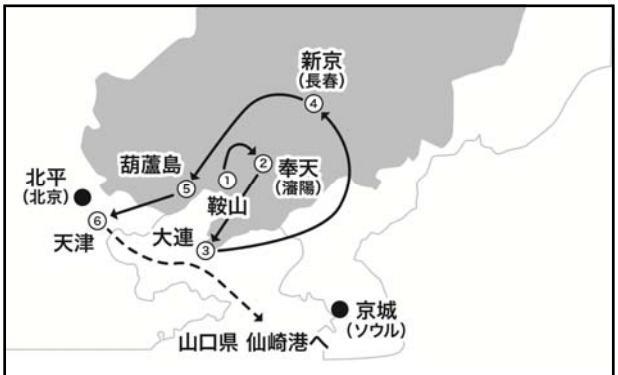
新甫八朗　丸山邦雄　武蔵正道

立ち上がった３人

- 英語が堪能な丸山邦雄（長野県出身）
- 資金力のある新甫八朗（北海道出身）
- 中国語が得意な武蔵正道（神奈川県出身）

在満邦人救出に向けての丸山邦雄さんたちの動き

（１）窮状を訴えるための命をかけた満州からの脱出
（２）政府・要人への訴え
（３）ＧＨＱ・マッカーサーへの直訴
（４）ラジオ放送での訴え
（５）パンフレットを作成しての市民への訴え
（６）全国各地での集会・講演会の開催
（７）国内外の新聞社への訴え
（８）自宅を引き揚げ者用の無料宿泊所に開放



（1）命をかけた満州からの脱出

（２）日本政府・要人への働きかけ

① 幣原内閣総理大臣、楢崎書記官長を訪問

② 吉田外務大臣を訪問

・吉田外相の返答　→　「日本には、今、外交はないんだよ。外務省の外交は棚上げになっているのだ。連合軍が進駐して占領政策を行っている日本には、独立した政治はないのだ。」

③ 佐藤栄作鉄道総局長官の協力

・３名に、国有鉄道全線２カ年無料使用の乗車証

→　全国の集会・講演会に駆けつけることが可能になる。

（３）ＧＨＱ・マッカーサーへの直訴

• １９４６年４月５日

• 「コロ島は私たちも今回直接立ち寄って見てまいりましたが、現在、満州における唯一の国府軍の勢力下にある港であります。私たちは、今日、是非、このコロ島に一日も早く引き揚げ船を出していただくことをお願いしたいと思い、参った次第です。＜丸山邦雄 著「なぜコロ島を開いたのか」より＞

丸山邦雄さんがマッカーサーに訴えた、満州における悲惨な状況

（1）全満170万の同胞中、既に難民化した者は46％すなわち81万人、そして、毎日毎日飢えと寒さと病気のため一日平均2400人余り、一週間に17000人が死んでいるのであります。これらの犠牲の大多数は生まれて間もない乳飲み子や、いたいけな幼児であります。これら戦争の何たるかを知らない無邪気な幼児が、飢えと病気と寒さに襲われ、骨と皮だけになって辛うじて生きている母に抱かれながら黙々と死んで行くのであります。

（2）戦争が終わった平和な今日でも、満州では爆弾こそ落ちないが、毎日毎日飢えと寒さと病気のため、さらには、掠奪、暴行、凌辱のため、戦争以上の悲惨な状況が展開され、犠牲者が続出し、修羅場のような悲劇が繰り返されているのであります。

＜丸山邦雄 著「なぜコロ島を開いたか 」より＞

丸山邦雄氏らの活動を支援したカトリック教会

大連カトリック教会
レイモンド・レイン司教

戦時中、京都の自宅に軟禁された
パトリック・バーン神父
マッカーサーの相談相手を務める

（4）ラジオ全国放送「在満同胞の実情を訴える」

昭、21―3―17日　夜七時―7時三十分
在外同胞の救済を訴へる
全国放送　於東京中央放送局

（5）パンフレットの作成

「在満同胞を救へ」

丸山邦雄　著

・終戦後の満州の深刻な状況と早急な引き揚げを訴える。

・定価２円

・もし、代金を支払うことが困るような人々には無料で配布する。

・販売後、全国から5000通の問い合わせの手紙が…

（6）全国各地での集会・講演会の開催

日比谷公会堂での講演より

「東京裁判を傍聴しました。戦犯被告たちこそ、すべからく国際裁判の大法廷で誠意を披歴して、海外在留同胞を速やかに帰還させることを、連合国首脳に対し血涙を吐露して、その実現を嘆願すべきであると信じます。」

「しかるに、彼らは戦後の多数国民の悲劇の救済について一言半句も発言しないことは、国民に対し、同胞に対し何らの誠意もなく‥」

〈飯山達雄「敗戦 引揚げの慟哭」の丸山邦雄氏の講演記録より〉

コロ島からの引き揚げの開始

(1) 1945（昭和20）年　5月14日　コロ島から在満同胞引き揚げ船の第一船が、一般邦人1219人を乗せて佐世保港に入港しました。

(2) 引き揚げには、アメリカの揚陸艦、旧日本軍の駆逐艦、戦時輸送船などによるピストン輸送が行われ、約2年間で105万人が帰還を果たしました。

(3) それまでの間、満州の地で犠牲になった日本人は約24万5千人にものぼりました。

富永孝子 著
「大連・空白の六百日　戦後、そこで何が起こったか」

丸山邦雄氏ら三人の行動が、実際の引き揚げにつながった、その理由は…

(1) 戦中戦後を通して日本と縁を切ることのなかったカトリック教会から多大な協力を得られたこと

(2) 丸山邦雄氏の、米国での研究生活で培った英語力と見識をもとにした、何としても在満同胞を救い出したいという私心のない行動

(3) ３人が運動を始めた時期、ちょうどＧＨＱや政府が真剣に引き揚げ船派遣を検討し始め、機が熟しつつあったという点

丸山邦雄 著「経済学要論」
（1967 昭和42年 出版）

「ユートピア」の実現に向けて

・「人類の社会から一切の貧困を追放して、豊かな、健全な楽しい社会を樹立する、すなわち『ユートピ』を実現するということは、すべての人々の夢である。しかし、このユートピアの実現も決して望みなき夢ではない。」
・「暗い社会を明るくし、貧乏を追放し、富の増殖によって市民の生活を充実し、人間の幸福を向上させることもまた、経済学の理想であり重要な対象である。」

＜丸山邦雄著「経済学要論」より＞

丸山邦雄氏の信条

「丸山邦雄代表の講演　『至誠天に通ず』」

「人間は至誠を以て事に当たるならば、そこに必ず道が開けるものであります。『至誠は天に通ず』という言葉は、古今東西を通ずる変わりない金言であります。」

＜丸山邦雄 著「なぜコロ島を開いたか」より＞

「丸山たちの行動は、国際的な政治力学の中で利用されたに過ぎない。引き揚げの世論を盛り上げたに過ぎない」という意見に対して‥

「私の立ち位置は違います。彼らの決死の努力がなければ、満州だけでなく、外地にとり残された人々の帰還がどれほど遅れたことか‥」

「たかが帰国を数か月早めただけという、彼らの功績を歪める意見がありますが、其の数か月で、どれほどの命が救われたことか‥」

＜「どこにもない国」の脚本を担当した大森寿美男氏＞

「どこにもない国」を制作したプロデューサー中村高志氏が語る、丸山邦雄氏の魅力

「悲惨な状況の中で、全く権限もなければ、資格もなく、誰かに何とかしてくれと頼まれたわけでもないのに、周りにいる人たちを救いたいという思いだけで、自分の命を守るも精一杯、自分の命すら守りきれないという時代の中で、人の命を救おうと、こんなに懸命に働いた人がいた。」

＜2019.7.6 中村高志氏の講演会より＞

飯山駅から東に100ｍほどの所にある公園に「丸山邦雄像」が建つ予定です。

ブロンズ像建設予定地から飯山駅を見る。

丸山邦雄像の銘板

(1)丸山邦雄氏は、1903年飯山市富倉滝ノ脇生。明治大学を卒業後、米国へ留学し1938年帰国。翌年、満州鞍山の企業に就職、1945年に満州で終戦を 迎えた。

(2)敗戦後の混乱で犠牲者が多数出ていた旧満州に おいて、丸山邦雄をリーダーに新甫八朗･武蔵正道の三氏は在満日本人の救済のため、命がけで同地を脱出し1946年3月帰国。

(3)在満日本人の惨状と引揚げの早期実現を政府要人や連合国へ陳情･嘆願。ラジオ放送での呼びかけや全国で講演会を続け、国民世論の高揚に尽力 し1946年4月、引揚船がコロ島へ派遣され、105万人余の帰国が実現した。

(4)丸山邦雄氏を顕彰することは、戦争の記録を新たな時代へ継承し、同氏の生き方から平和の尊さを学び、明日へ平和をつなげる一歩とすることを誓うものである。

(5)丸山邦雄氏は1981年10月17日逝去享年78歳。

2020年6月　飯山市教育長　　長瀬 哲　　書

満蒙開拓平和記念館からのメッセージ

未来に向かって

あの時代に問いかけてみます。
なぜ「満州」へ行ったのですか。
今を生きるあなたに問いかけてみます。
あの時代に生きていたらどうしますか。

日本と中国双方の人々に
多くの犠牲を出した
「満蒙開拓」とは何だったのでしょうか。
長く人々の心の奥に
閉ざされていた記憶に寄り添い、
向き合いにくい真実に
目を向ける時がきました。

この歴史から何を学ぶのか、
私達は問われています。
「負の遺産」を「正の遺産」へと
置き換えていくことを、
その英知が私たちに問われています。

歴史に学び、今を見つめ、未来をつくる。
同じ過ちをくりかえさないために
平和な社会を築くために。

（満蒙開拓平和記念館からのメッセージ）